

港区立郷土歴史館

歴史館だより

特別展「激動する幕末維新の港区」

江幡吉平顕彰の動向 一友成 仲を中心に

岡谷 成康

(学芸員)

文 久元(1861)年に水戸浪士が当時のイギリス公使館であった高輪の東禅寺を襲撃した「東禅寺事件」について、『歴史館だより』では、これまで3回に渡って関係する記事を掲載しており、東禅寺事件で戦死した外国御用出役の江幡吉平や、イギリス政府から贈られた東禅寺事件メダルの授与などに関して紹介しました(vol.06-2、vol.11-1、及びvol.16-2)。

今回は、明治時代後半から大正時代に行われた吉平を顕彰する活動について、友成仲という人物を通じて紹介します。

仲は、鉄砲玉薬奉行(江戸幕府が保有する鉄砲の弾と火薬を製造・管理)を務めた旗本・友成郷右衛門の四男として、安政4(1857)年5月15日、江戸市谷の鷹匠町(現在の新宿区)で生まれました。仲の父・郷右衛門は砲術の専門家で、かつ東禅寺事件で戦死した吉平の砲術の師匠であり、この縁によって、仲は吉平の顕彰活動に関与したと推測されます。明治18(1885)年に工部大学校(現在の東京大学工学部)を卒業した後、土木技術者として北海道の鉄道敷設や灌漑溝掘削で活躍、大正11(1922)年2月には北海土功組合の主任技師に就任します。昭和5(1930)年8月に退任し、翌年2月19日に東京で亡くなりました。



友成仲 写真(北海土地改良区蔵)

さて、吉平の顕彰活動が始まるきっかけは、東禅寺事件当日、外国御用出役の肝煎として警衛していた天野可春(岩次郎)の回顧談が『史談会速記録』第167輯(明治40年1月刊)に掲載され、談

話中で吉平に関する調査を呼び掛けたことでした。同年5月には「幕府士江幡吉平君之事歴」が『史談会速記録』第171輯に掲載されます。

この事歴掲載に際し、吉平の遺族と史談会など関係者との間にいたのが仲でした。「東禅寺事件銀製メダル及び江幡家文書」(当館蔵、令和2(2020)年度港区指定文化財)には、この時に作られた友成仲書状(吉平の遺族宛)など関係史料が含まれています。

大正4年には、有志の者たちが史談会を通じて、大正天皇の即位大典を理由に可春への追賞と位勲授与、及び吉平の靖国神社合祀と遺族への恩典授与を議会へ請願し、同8年には貴族院議員の男爵・高千穂宣麿を通じて、貴族院へ吉平の靖国神社合祀が請願されました。しかし、これら請願に関する史料は確認できるものの、管見の限りでは他に史料を見出せず、恐らく却下されたと推測されます。

吉平の遺族に対して、大正4年に仲は請願に関して言及する書状を出し、同8年のものは確認できないものの、後年の書状で「史談会其他ニ於テ、議会ニ建議相成タルハ、故ナキニアラス」と述べており、仲が吉平の顕彰活動に積極的であったことが窺えます。

これらの動向や当館蔵の仲の書状などからは、維新前のこととはいえ、国家に殉じた幕臣に政府はしっかり報いて欲しい、旧幕臣の者を政府にもっと認めて欲しい、との想いを察することができます。

令和6年10月19日から12月15日まで開催する特別展「激動する幕末維新の港区」では、港区域と深く関係し、日本の歴史にも大きく影響した諸事件を通じて、幕末維新时期の歴史を振り返ります。東禅寺事件も諸事件の一つとして紹介しますが、事件当時の動向は勿論、今回まで『歴史館だより』で紹介した成果も展示する予定です。ぜひご覧ください。

参考文献

- 『流 北海土地改良区80年史』(北海土地改良区、2001年5月)
- 吉崎雅規「東禅寺事件の「賞牌」 警護の武士に贈られたビクトリア女王のメダル」(『資料館だより』第55号、港区立港郷土資料館、2005年3月)
- 「大正大礼贈内申書巻三十」(国立公文書館蔵)

港区立郷土歴史館

歴史館だより

湖雲寺跡遺跡の柿経こうんじ こけらぎょう岡本 康則
(学芸員)

六 本木四丁目にある江戸時代の寺院跡の湖雲寺跡遺跡からは、計3,240枚の柿経が出土しています。今回、旗本永井家第七代当主の墓から出土した柿経の保存処理が終了したので、紹介します。

柿経とは、柿と呼ばれる木の薄い板ほけきぎょうに法華経などの仏教の経典を書き写したもので、その多くは、20枚を1組とし、右から左に写経していくものです。1枚には17文字が書かれ、20枚目まで書いたのちは、すべて裏返し、また右から左に写経していきます。これは、生きている人が亡くなった人の冥福を祈るために行う追善供養や生前に功德くどくを積むために行われました。

柿経の歴史は古く、平安時代から始まり、江戸時代まで続いたと考えられています。

旗本永井家第七代当主永井尚監なおてる(1773年～没年不明)の墓からは長さ約31.2cm、幅約3.3cm、厚さ約0.06cmの柿経が2,855枚見つかりました。これらは130～150枚を1組とし、長方形の木箱2つに分けて収納されていました(写真1)。柿経には妙法蓮華経みょうほうれんげの巻第一から八までが写されていましたが、発掘調査報告書(株式会社パスコ、2021年)によると、筆跡の違いから8～9人で写経したと推測されています。柿経の文字を見ると、文字線の太さが違ったり、文字の崩し方が異なっており、複数人で写経したことがうかがえます(写真2・3)。また、誤字脱字がみられたり、経文の順番を間違えていたり急いで写経

したと考えられる部分も確認できます。

湖雲寺跡遺跡から出土した柿経は、永井尚監の墓から出土したことから、尚監の追善供養のために写経したものと考えられ、江戸時代の死者への思いを知るうえで貴重な資料です。

今後、保存処理後の柿経を何らかの形で公開することを考えておりますので、その際はぜひご覧ください。

参考文献

石田茂作「元興寺極楽坊発見の柿経」『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究』思文閣出版、1964年(再録『佛教考古学論攷 三 経典編』思文閣出版、1977年)

松浦五輪美・原田憲二郎「柿経の考察一分類と編年について」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』奈良市教育委員会、1992年
株式会社パスコ『湖雲跡遺跡発掘調査報告書—宿泊施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書84 Great Eagle Tokyo TMK、2021年



写真1 柿経出土状況



写真2 柿経1



写真3 柿経2